

キリスト教がやって来た

太平洋の島嶼国はいずれも敬虔なキリスト教国である。島の人々のほとんどがキリスト教を信仰しており、教会は彼らの生活の隅々にまで影響を及ぼしている。小さな村にも3つ、4つと異なる宗派の教会があり、人々はそのいずれかの教会の信徒で、皆正装して礼拝に出かけるというのが島の日曜日の見慣れた光景だ。

太平洋の島々へ人類が移動を開始したのは、今から約3500年前と言われている。ニューギニアからトンガ、サモアへと彼らは移動し、約2000年前には現在のフランス領ポリネシアに到達して、そこからハワイ、イースター島、ニュージーランドへと拡散していったというのが、オーソドックスなシナリオだ。移住の経路や年代については諸説あるが、島嶼部への人類の移動は、大まかに見れば西から東へ向けてのものだった。

一方、キリスト教は、それとは逆に、東から西に向けて太平洋の島々に伝わっていった。太平洋諸島は、19世紀にキリスト教各宗派が最も盛んに宣教活動を展開し、成功を収めた地域だが、その先鞭を付けたのが1795年に設立された「ロンドン伝道協会」である。同協会は1797年に宣教師団をタヒチに送り、1815年にはキリスト教がタヒチの国教となった。彼らは、1840年代に入るとサモアに進出し、19世紀後半には宣教地域をニューギニアにまで拡大する。また、1814年に設立された「ウェスレー派伝道協会」も、1819年にニュージーランドに進出し、1820年代にトンガ、30年代にフィジー、19世紀後半にはメラネシアへと、宣教地域を西へと拡大した。

太平洋諸島でキリスト教は急速に受け入れられていったが、それには理由があった。西洋人と本格的に接触を開始する18世紀後半から19世紀初頭にかけて、特にポリネシアの島々では、規模の差はあれ階層化の進んだ首長制社会が確立しつつあった。そこで宣教師は、島の社会制度の頂点に立つ首長を改宗させることによって、その下に統治されている平民を一挙に改宗する戦略を取ったのである。一方、首長も政治・教育・医療の分野で宣教師の協力を必要とし、彼らの力を借りて自らの地位の強化を図った。こうして、タヒチやハワイ、トンガなど、強固な首長社会が形成されつつあった島では、首長の庇護の下、「伝道王国」が形成されていったのである。

宣教戦略としての「文明化」

宣教師の取った宣教戦略の中心は「文明化」であった。宣教活動の初期の段階では、島民のキリスト教化と文明化のどちらに重点を置くかについて、宗派によってその立場に若干の違いがあったが、一般に宣教師達は早い段階から文明化に重点を置いていた。だが、島民を文明化してからキリスト教化するという方針にはある種の偏見が潜んでいた。島民はキリスト教を受け入れるのに必要とされる規律正しさや自制心といったものを欠いているだけでなく、キリスト教の教義を理解するための抽象的な思考もできないと見なされていたのである。

宣教師が本格的に活動を開始する頃には、島社会では、嗜好品、ナイフ、衣料、銃など、西洋の物品に対する需要が高まりつつあった。宣教師も例えば衣料などの需要を高めることで、貨幣経済を導入し、賃労働の必要性を高め、勤勉さの重要性を説き、文明人の条件である規律や自制心といったものを島民に

植え付けていった。

また、言葉の障壁がある初期の段階では、目に見せて示すことが極めて有効なコミュニケーションの手段であり、島民を教化する方法であった。宣教師は、宣教ステーションで物質的に豊かで規律の取れた生活を送ることで島の人々にキリスト教徒の「良き生活」を提示し、彼らの興味を引きつけたのである。このモデル村としての宣教ステーションの設置は、プロテスタントの宣教活動に顕著であり、宣教師は妻子と共に生活することで手本となる生活様式を示した。だが、勤勉さや規律正しさであれ、手本と考える生活様式であれ、それは宣教師が本国で属していた社会階級の倫理観に根ざしたものであり、彼らが伝えようとしたキリスト教のメッセージも自らの文化を色濃く反映するものであったと言える。

このような宣教方法は確かに島民の生活に影響を与えたが、宣教戦略の中で島の文化の根幹に最も大きな衝撃を与えたのが文字教育である。宣教師は当初、読み書きの重要性をそれほど認識していなかったが、島民の文字への強い好奇心に応じるべく、文字教育を始めた。宣教ステーションには学校が開設され、特に子供と女性を対象として宣教師やその妻によって教育が施された。文字教育は直接的には現地語に翻訳された「聖書」を読めるようにすることを目的としていた。しかし、読み書きの能力は心を構成し、信仰に必要な語彙を与え、言葉を単純明快なものにする。島民は文字を手に入れることと引き換えに豊かな口承伝承の文化を失い、過去から引きはがされることになった (Denig 1980: 202)。それは宣教師の意図したことではなかったが、文字教育は島民の世界観に決定的な影響を与えたのである。

改宗対象者の選択と島民教師の育成

島社会を治める首長クラスの人物を見つけ、彼の信頼を得て、その庇護のもと全島にキリスト教を広めるという宣教戦略は、首長制の発達したポリネシアで成果を上げたが、宣教地域が西に拡大するにつれ、有効な手段ではなくなった。首長制と異なる社会制度を持つ島では、全島の統治者を見つけることは不可能だったし、時代が下れば島民にとって利用価値のある白人は宣教師だけではなくなくなったからである。そのような場合、島の社会制度の中で最も不利益を被っている人達や、キリスト教の教えに新たな価値を見出す人達が、改宗対象者となった。

一方、宣教地域が西へ拡大するにつれて、新たな宣教方法が採用された。島民教師の育成である。これは、白人宣教師の不足という背景に加えて、彼らよりもポリネシア人が現地での宣教活動に適しているという判断に基づくものであった。ロンドン伝道協会は、1820年代から30年代にかけてタヒチ人教師をクック諸島、トンガ、サモアに派遣し、19世紀後半にはサモア人教師を育成してニューギニアへ派遣した。また、「ハワイ伝道協会」に派遣されたハワイ人教師も19世紀後半にマイクロネシアの島々で宣教活動を展開した。キリスト教の宣教活動の西進によって島民教師の果たした役割は小さくなかった。

[参考文献]

Denig, Greg (1980) *Islands and Beaches: Discourse on a Silent Island Marquesas 1774 – 1880*. Chicago: The Dorsey Press.